



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

大学不適応感と進路成熟度の関連

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 和田,愛祐美, 松尾,直博 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/127861

大学不適應感と進路成熟度の関連

和田 愛祐美*・松尾 直博**

教育心理学

(2011年9月28日受理)

1. 問題と目的

近年、無気力・アパシー・留年・中退などの大学生の不適應の問題が深刻化している。藤井(1998)³⁾によると、ステューデントアパシーや卒論恐怖、触れ合い恐怖などの相談が学生相談所にも増加しているという。また、中退の理由は、大学不適應だとは言いきれず、経済的理由など様々にあることが推測されるが、実際に中退者数はとても多い。文部科学省⁷⁾は、国公私立全1,225校(うち、回答があったのは1,148校)を対象にした調査をもとに、2008年度の大学・短大・高等専門学校の中退者数は49,394人、2007年度は63,421人であったという推計を発表している。

こうした中で、「他大学に入りなおしたい」「大学に対して不満がある」など、大学に対する不適應感についても問題視されている。大学適應度について、Benesse教育開発センター(2008)²⁾によれば、「他の大学に入り直したいと思うことがありますか」という質問に対し、「よくある」と答えた学生は17.1%、「たまにある」と答えた学生が28.6%であった。さらに、大学志望度と大学適應度の関連については、「ぜひ入りたいと思って進学した」と答えた学生では「他の大学に入り直したいと思うことがある」は26.7%だったのに対して、「やむをえず進学した」と答えた学生では76.9%という結果が出ている。

不本意入学などの進学希望者の進路選択に関する問題は、大学不適應の要因の一つとして指摘されている(山田, 1980¹⁵⁾; 土川, 1981 他¹⁴⁾)。柳井(2001)¹⁷⁾は、進路決定に問題があったり、未熟なまま決定されると、学生はその後の生活に適應することが困難とな

り、アパシーのみならず、学習意欲の欠如、留年、心身症などのさまざまな問題が起きやすいと述べている。また、下山(1983)¹²⁾が指摘するように、多くの生徒において進路決定のレディネスができていないにもかかわらず、受験という外部からの押し付けられる課題を前に未熟な決定をしなければならない状態にある。さらに、進学大衆化の流れの中では、こうした傾向がさらに強まり、進学に対する意識が未熟なまま、進学を志望する者がさらに増加することが予想される(望月, 2004⁶⁾)。大学不適應や不適應感を未然に防ぐためには、大学進学に際し未熟な進路決定をしないことが必要であることが示唆されている。

出現する進路に対する認識や探索、意志決定の根底にある進歩的变化を進路成熟という。進路成熟は、進路指導における重要な概念のひとつとして、近年の研究では多く用いられてきた用語である。坂柳(1991)⁸⁾は、進路成熟概念の基本的特徴を整理し、中学生や高校生を対象とした場合の主要な進路内容を、「人生進路」、「職業進路」、「教育進路」の3つの進路系列に区分して考察している。

さらに、進路成熟を測定する尺度として、進路成熟態度尺度(坂柳, 1992⁹⁾)が作成されている。この尺度は、進路成熟度尺度(CMAS-4)(坂柳・竹内, 1986¹¹⁾)や進路成熟の測定に関する研究を参考に作成され、「教育的進路成熟」、「職業的進路成熟」、「人生的進路成熟」という3つの進路系列それぞれの進路成熟度を測定できる。進路への意識を調べるにあたり、この進路成熟態度尺度を使用した研究は多い(望月, 2004⁶⁾; 長井・浅川2007⁵⁾ 他)。

進路に対して未熟な意識のまま進路決定をしてしま

* 東京学芸大学大学院教育学研究科(184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

** 東京学芸大学(184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

うことと、大学不適應の関連は指摘されているものの、進路に対する意識とは、進学先のみへの意識なのか、その先の将来までの意識のことなのかは定かではない。大学進学希望者に対する進路指導において、教育的進路成熟が重視されることは当然である。しかし、大学進学にあたり、職業や人生を見通して進路を決定する方が、より進路に対して成熟した考えを持っていると言えるのではないだろうか。つまり、大学進学者が、教育進路だけでなく、職業や人生に対する進路成熟が進んでいることがどの程度、大学不適應感に影響を与えるのか明らかにすることが必要である。

また、昨今大学進学の為に塾・予備校等を利用することは特別なことではなくなっている。塾・予備校は、受験のために学力を上げる場や学力競争の場、進学に対しての情報を得る場であり、学校以外で進路指導を受ける機会のある場でもある。つまり、塾・予備校等を利用する生徒は、情報を受け取りやすい環境にあり、進路指導を受ける機会も多様化するため、進路成熟が進みやすい可能性がある。さらに、大学受験に際して、浪人を経験した学生は現役入学生に比べて1年もしくはそれ以上、進路について考える時間が長くなるといえる。この受験期間の長さが進路成熟に与える影響も考えなくては行けない。

そこで、本研究では、大学不適應感と教育・職業・人生的進路成熟度との関連について検討するとともに、大学受験時の学習状況、現役/浪人、塾・予備校の利用の有無と進路成熟の関連についても検討する。

大学への適応にとって、最も重要な時期は、環境が変化し、多くのストレスが存在する入学直後であると山田(2006)¹⁶⁾は述べている。Benesse教育開発研究センター(2008)²⁾の調査でも、大学に対する満足度のデータは、学年が変わることでは大きな差は見られない。入学直後の大学適応感がその後の適応感に大きく影響するといえる。さらに、大学受験の際の進路に対する意識を調査するにあたり、その記憶は新しいほうが望ましい。

以上のことをふまえ、本研究の対象者は受験を終えたばかりで入学直後の大学1年生に限定し、調査期間を、大学の講義が始まったばかりの5月と、前期日程終了の近づく7月に設定することで、大学生活初期の時期で大学不適應感にどのような変化が見られるのかを検討することにした。

2. 方法

2. 1 調査1

2. 1. 1 調査方法

質問紙調査法

2. 1. 2 調査対象者

2010年度に大学入試を経験した国立大学の1年生275名(男性103名 女性172名)

2. 1. 3 調査期間

2010年5月7日～5月20日

2. 1. 4 手続き

大学の講義の時間内に質問紙を配布し、回答を依頼した。その際、授業の評価などとは一切関係しないことを教員から伝えてもらった。

2. 1. 5 質問紙の構成

○フェイスシート

学年・年齢・性別・個人番号(自分と母親の誕生日を並べた8桁の数字)

○大学受験時の状態を尋ねる項目14項目

現役/浪人、受験方法、入学した大学は第何志望か、塾・予備校等の利用の有無等

○進路成熟態度尺度(坂柳, 1992⁸⁾)45項目

教育的進路成熟度・職業的進路成熟度・人生的進路成熟度の各15項目3つの下位尺度から構成されており、得点が高いほど進路成熟度が高いことを示す。(1)～(5)の5件法で尋ねた。

○大学不適應感尺度 26項目

・学校適応感尺度(石田, 2009⁴⁾)16項目

本研究では、項目の「学校」という言葉を全て「大学」に書き換えて使用した。

「教師」「学習」「友人関係」「大学全体」の各4項目4つの下位尺度から構成されている。(5)「とてもよくあてはまる」～「まったくあてはまらない」(1)の5件法で尋ねた。

・大学生生活不安尺度(藤井, 1998³⁾)の下位尺度「大学不適應」5項目

・ステューデントアパシー尺度(高尾, 1993¹²⁾)の下位尺度「学業からの退却」5項目

2. 2 調査2

2. 2. 1 調査方法

質問紙調査法

2. 2. 2 調査対象者

2010年度に大学入試を経験した国立大学の1年生236名

このうち、調査1, 2のどちらとも回答した190名

(男性61名 女性129名)を分析対象とした。

2. 2. 3 調査期間

2010年7月8日～7月16日

2. 2. 4 手続き

調査1と同大学の同講義の時間内に質問紙を配布し回答を依頼した。

2. 2. 5 質問紙の構成

- フェイスシート(調査1で使用したものと同様)
- 大学不適応感尺度(調査1で使用したものと同様)
- 片頭痛の症状の有無, 気になる体調の変化の有無を尋ねる項目等5項目(本研究の分析では使用しなかった)

3. 結果

3. 1 進路成熟度

進路成熟度全体と各下位尺度の基礎統計量を表1に示す。

進路成熟度と諸要因の関連を調べるために、t検定を行ったところ、現役入学の学生(N=214, M=165.82, SD=26.93)よりも、浪人を経験した学生(N=54, M=174.63, SD=25.09)の方が5%水準で有意に進路成熟度が高かった(t(268)=2.179, p<.05)。この結果は、学年が上がると進路成熟度も徐々に上がっていくという先行研究(坂柳, 1993¹⁰⁾)の結果とも一貫性があり、現役生よりも1年以上長く大学受験のために勉強をする浪人生は、その分自分の進路について深く考えることが出来ているということを示唆している。

表1 進路成熟度得点の基礎統計量

	N	min	max	平均値	SD
進路成熟度(合計)	275	61	225	167.73	26.537
教育進路成熟度	275	29	75	60.24	9.134
職業進路成熟度	274	15	75	53.15	11.719
人生進路成熟度	274	15	75	54.73	9.779

3. 2 学校適応感尺度(5月のデータ)の信頼性・妥当性の検討

石田(2009)⁴⁾の学校適応感尺度は中学生用に作成されたものである。そのため、大学生の学校適応感、学校不適応感を測ることができているのか、信頼性と妥当性の検討が必要である。まず、学校適応感尺度の内的整合性を検討するためにCronbachの α 係数を算出したところ $\alpha = .878$ であった。IT関連でも、 $r = .608-.805$ と強い正の相関が見られた。尺度自体の信頼性は十分に高いと言える。

収束的妥当性の検討として大学不適応感を測定する類似の尺度である、大学生生活不安尺度(藤井, 1993³⁾)の下位尺度「大学不適応」と、ステューデントアパシー尺度(高尾, 1993¹²⁾)の下位尺度「学業からの退却」を使用し、相関を調べた。学校適応感尺度とステューデントアパシー尺度、学校適応感尺度と大学不適応尺度との間にそれぞれ、 $r = -.326$ ($p < .01$)と $r = -.536$ ($p < .01$)と有意な負の相関が見られた。

以上のことから、石田(2009)⁴⁾の学校適応感尺度で、大学生の学校適応感(大学適応感)を測定できたと考え、分析に使用した。学校適応感尺度の合計得点を大学適応感得点とし、得点が高いほど大学に対する適応感が強く、得点が低いほど大学不適応感が強いことを示す。また、因子分析で、石田(2009)⁴⁾の分析結果とおおむね同じ結果が得られたため、「教師・学習関係」、「大学全体」、「友人関係」の3つの下位尺度を採用した。

大学不適応感と諸要因の関連を検討するためにt検定を行ったところ、入学した大学が第1志望以外だった学生の方が、第1志望だった学生よりも、5月の大学不適応感が有意に高かった(t(262)=4.111, $p < .01$)。さらに、大学不適応感の下位尺度のt検定を行ったところ、「教師・学習関係」は5%水準で(t(262)=1.899, $p < .05$)、「大学全体」は1%水準で(t(262)=7.023, $p < .01$)、第1志望だった学生の方が、5月の大学適応感は有意に高かった。表2に各得点の平均値とSDを示す。

表2 第1志望/その他における平均値とSD

	第1志望(N=202)		その他(N=62)	
	平均	SD	平均	SD
大学適応感	61.33	9.84	55.4	9.66
教師・学習関係	25.16	5.60	23.58	6.10
大学全体	19.62	3.82	15.69	3.54
友人関係	16.55	2.94	16.21	2.83

3. 3 大学不適応感の変化について

大学不適応感の変化について、個人番号を照合し、対応のあるt検定を行ったところ、7月の大学適応感得点よりも5月の得点がありに高かった(t(190)=3.828, $p < .01$)。7月の方が適応感が低下したという結果が得られた。

さらに、塾・予備校の利用(有/無)、現役生か浪人生か、調査時期(5月/7月)の3要因分散分析(混合計画)において、塾・予備校の利用(有/無)と調査時期(5月/7月)には5%水準で有意な交互作用が見られた(F(1,183)=4.222, $p < .05$)。単純主効果の検定の結果、塾利用有において調査時期は5%

水準で (F (1,183) = 4.627, p<.05), 塾利用無において調査時期は0.1%水準で (F (1,183) = 11.284, p<.001) 有意であった。大学適応感得点の平均値とSDを表3に、交互作用の結果を図1に示す。

表3 大学適応感得点の郡別の平均値とSD

	N	平均値	SD
5月	190	60.95	9.18
7月	190	59.10	9.78
現役	214	59.53	10.25
浪人	54	61.17	9.17
塾を利用した	141	59.51	9.66
塾を利用していない	129	60.09	10.56

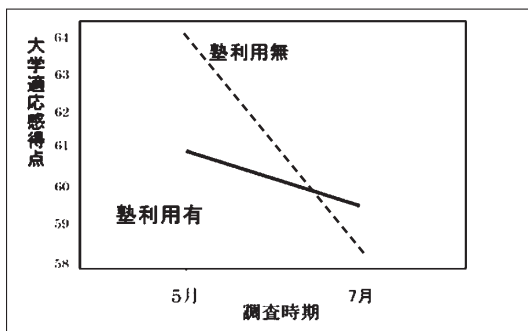


図1 塾・予備校の利用と調査時期の交互作用

3. 4 大学不適応感と進路成熟度の相関関係

大学適応感得点と進路成熟度には相関関係が見られた (r=.276, p<.01)。大学受験時に進路成熟度が高かった学生は入学後の大学不適応感が低いという結果が得られた。

教育・職業・人生、3つの下位尺度それぞれと大学不適応感にも、それぞれ1%水準で有意な相関関係が見られた。重回帰分析では教育、人生の2つの下位尺度の標準回帰係数は有意であり、モデルの説明率は0.1%水準で有意であった。職業的進路成熟度の標準回帰係数は有意ではなかった。以下の表4, 5に相関分析と、重回帰分析の結果を示す。

表4 各尺度間の相関係数

	教育的 進路成熟度	職業的 進路成熟度	人生的 進路成熟度	大学適応 感得点5月
教育的	—	.586 (**)	.462 (**)	.297 (**)
職業的		—	.611 (**)	.223 (**)
人生的			—	.254 (**)

** p<.01

表5 大学適応感得点 (5月) に対する進路成熟度の下位尺度の重回帰分析の結果

	β
教育的進路成熟度	.230**
職業的進路成熟度	-.002
人生的進路成熟度	.149*
$R^2 = .106^{***}$	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

β : 標準回帰係数 R^2 : 重決定係数

4. 考察

4. 1 大学不適応感を軽減させるには

大学不適応感とは第1志望以外で入学した学生の方が、第1志望で入学した学生よりも強いという結果が得られた。これは、不本意入学が大学不適応に繋がりがやすいという先行研究や指摘と一致するものである。第1志望でない大学に入学することが全て不本意入学と言えるかどうかには疑問が残るが、今回の結果は先行研究等を支持する結果であると言える。また、下位尺度ごとの分析の結果によると、「友人関係」に関する不適応感には、第1志望で入学したかそれ以外かでは差が見られない。しかし、「大学全体」「教師・学習関係」に関しては、第1志望でない学生の方が、不適応感が強いことが分かる。第1志望以外の学生には特に友人関係に対する不安や不満は顕著ではないが、大学全体に対する帰属意識などが弱く、大学の教師や授業・学習に対して不安や不満が見られやすいのかもしれない。大学不適応感を軽減させるには、これらに対するサポートが必要であることが示されている。

4. 2 時期による大学不適応感の変化

本研究では、大学不適応感の測定を2度行ったところ、入学して間もない5月よりも前期日程終了の近く7月の方が大学不適応感は強くなることが明らかになった。入学後、実際に大学生活を経験し、不安や不満を感じる出来事などに直面していくことで、適応感が下がったのではないだろうか。

また、塾・予備校を利用していなかった学生の方が、5月に比べ7月に適応感が下がる傾向がより顕著に見られることも分かった。これは、塾・予備校に通う生徒は、進路指導を受ける機会が多く、大学に対する情報を得る機会が多いことが原因ではないかと考えられる。実際の大学生活や、進学する大学に関する正確な情報をより多く得た上で進学先を決めていけば、入学して大学生活が始まってからも適応感に変化は生

じにくいかもしれない。大学に関する情報が少なく、期待や想像ばかりのまま進学先を決めてしまうと、入学後に不安や不満が起こりやすいのではないだろうか。未熟な進路決定は大学不適應の原因となると数々の先行研究でも述べられてきているが（柳井, 2001¹⁷⁾など）、未熟な進路決定を防ぐためには、本人の意識だけでなく、実際の進路決定の過程や状況も重要であると言える。

学校における進路指導においても、進路指導の担当教師からだけでなく、様々な人から進路指導を受ける場を設け、実際の大学や大学生活に対するより多くの具体的で正確な情報を提供することが必要であると考えられる。

4. 3 大学不適應感と進路成熟度の相関

進路成熟度が高いと大学不適應感が低くなるということが分かった。また、大学不適應感と教育的進路成熟度、人生的進路成熟度には有意な相関が見られたが、職業的進路成熟度との相関は疑似相関と思われる。これは、教育・職業・人生の3つの進路成熟度は、互いに相関が非常に高いためであると考えられる（表4参照）。本来、「進路に対する意識が成熟する」ということは、教育・職業・人生のどれか一つの進路に対する意識が成熟するというのではないのではないだろうか。先行研究でも、中学生から高校生に対しての縦断的研究が行われているが、3つの進路成熟度は学年が上がるにつれて同じようにだんだん高くなっている（坂柳, 1993¹⁰⁾）。つまり、教育・人生に対する進路成熟度が高ければ、職業的進路成熟度も高いはずなのである。

Benesse教育開発研究センター（2005）¹⁾が大学1年生に対して、大学進学を決めた理由について質問をしているが、職業を意識した時期が遅いほど「すぐに社会に出るのが不安だから」「自由な時間を得たい」「周囲の人がみな行くから」など消極的な理由を挙げる学生が顕著であるという結果も出ている。

したがって、大学不適應感は、職業的進路成熟度と無関係とは言えず、大学受験時から大学不適應感の強まりを予防するには、教育・人生的進路成熟度を高めることが必要であり、それは同時に職業的進路成熟度を高めることにもつながると考えられる。大学受験者に対する進路指導は、志望する進学先等についての教育的な進路指導だけでなく、将来の人生についても考えて進路選択をするための指導や、職業に対する進路指導も、大学不適應感を入学前に予防するために有効であると言える。

5. 今後の課題

本研究の調査対象者の教育・職業・人生の進路成熟度の得点は、坂柳（1993）¹⁰⁾の結果よりも、全て高い得点に分布していた。集団により、進路成熟度の得点は様々に分布することが予想される。進路成熟度の高い集団だけに偏らないよう、今後は、公立・私立、偏差値の高低なども考慮し、複数の集団からさまざまなサンプルを集め、進路成熟度の特徴を調査していくことが必要である。

6. 引用文献

- 1) Benesse教育開発研究センター 2005 進路選択に関する振り返り調査 — 大学生を対象として —
http://benesse.jp/berd/center/open/report/shinrosentaku/2005/houkoku/furikaeri3_1_14.html
- 2) Benesse教育開発研究センター 2008 大学生の学習・生活に関する意識・実態調査
http://benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/hon/daigaku_jittai_2_1_1.html
- 3) 藤井義久 1998 大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 68, 6, 441-448
- 4) 石田靖彦 2009 学校適応感尺度の作成と信頼性, 妥当性の検討 愛知教育大学教育実践センター紀要, 12, 287-292
- 5) 長井政寛・浅川潔司 2007 高校からの心理的自立が青年の進路成熟に与える影響 日本教育心理学会総会発表論文集(49), 332, 2007-08
- 6) 望月由起 2004 浪人生の教育的進路成熟に関する予備校の進路指導効果 進路指導研究, 22, 2, 1-9
- 7) 文部科学省 2008 基礎データ集
www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/021/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2009/05/28/1267794_2.pdf
- 8) 坂柳恒夫 1991 進路成熟の測定と研究課題 愛知教育大学教科教育センター研究報告, 15, 269-280
- 9) 坂柳恒夫 1992 中学生の進路成熟に関する縦断的研究 愛知教育大学教科教育センター研究報告, 16, 299-308
- 10) 坂柳恒夫 1993 高校生の進路成熟に関する縦断的研究 愛知教育大学教科教育センター研究報告, 17, 127-136
- 11) 坂柳恒夫・竹内登規夫 1986 進路成熟尺度(CMAS-4)の信頼性および妥当性の検討 愛知教育大学教科教育センター研究報告, 36, 169-182
- 12) 下山晴彦 1983 高校生の人格発達状況との関連性についての一研究 教育心理学研究, 31, 157-162
- 13) 高尾正 1992 青年のアパシーに関する研究 I 相愛大

学特別研究報告, 9, 75-85

- 14) 土川隆史 1981 スチューデント・アパシー 笠原嘉他
(編) キャンパスの症候群 至文堂
- 15) 山田和夫 1980 大学生の登校拒否 詫摩武俊他 (編)
登校拒否 有斐閣
- 16) 山田ゆかり 2006 大学新入生における適応感の検討
名古屋文理大学紀要, 6, 29-36
- 17) 柳井 修 2001 キャリア発達論 - 青年期のキャリア形
成と進路指導の展開 ナカニシ出版

大学不適應感と進路成熟度の関連

The Relationship between the Feeling of Maladjustment to College and Career Maturity

和田 愛祐美*・松尾 直博**

Ayumi WADA and Naohiro MATSUO

教育心理学

Abstract

The purpose of the present investigation was to examine the relationship between the feeling of maladjustment to college and students' career maturity at the time of preparing for college entrance examination. A questionnaire was conducted to the college student in the first year two times in May and July. Results revealed a strong correlation between the feeling of maladjustment to their college and the students' educational career maturity, and also to one between the feeling of maladjustment and the students' life career maturity. These results suggested that not only educational career guidance but also life career guidance are useful in preventing their increased feeling of maladjustment to their college. The feeling of maladjustment to their college in July was stronger than in May. Further the results for students who did not go to cram schools showed a stronger tendency.

Key words: college students, feeling of maladjustment, career maturity

Department of Educational Psychology, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨:本研究では、大学不適應感の高まりの要因として、大学受験時の受験生の進路成熟度に着目した。さらに大学不適應感の時期による変化を調べるために、入学直後の大学1年生に対して5月と7月の2回にわたって質問紙調査を実施した。大学不適應感と、教育的進路成熟度、人生的進路成熟度はそれぞれ強い相関関係にあることが分かった。大学不適應感の高まりを入学以前から予防するためには、大学受験者に対する進路指導の場において、受験校についての教育的な進路指導だけでなく、将来の人生についても考えて進路選択をするための指導を行い、受験生の進路成熟度を高めることが有効であると示唆された。また、入学直後の5月よりも7月の方が大学不適應感は強まること、さらにその傾向は、塾や予備校を利用していなかった学生においてより顕著に見られることが明らかになった。

キーワード: 大学生, 適應感, 進路成熟度

* Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

** Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)